

## 震災復興と

## 政治について追究し、ジャーナリズムの道へ。

三陸河北新報社

### 庄司 尚広さん

2015年3月愛知淑徳大学交流文化学部交流文化学科卒業。2018年3月に明治大学大学院政治経済学研究所博士前期課程(政治学専攻)を修了後、同年4月三陸河北新報社に入社。2019年4月河北新報社編集局整理部に出向し、2020年4月から河北新報メディアセンターに勤務。

### 震災復興と向き合ったゼミでの学び。

私は現在、地元宮城県で報道の仕事をしています。きっかけは、愛知淑徳大学で西尾先生のゼミに出会ったことです。

2011年3月11日、大学へ入学する直前、私も東日本大震災で被災しました。入学後、自分なりに震災と向き合っていたと思うようになり、「東日本大震災」を研究テーマとする西尾先生の日本政治史ゼミを選びました。ゼミでは震災に関する文献を輪読したり、宮城・福島両県へ足を運び、現地調査も行いました。大学の仲間と現地の人からお話を聞き、状況を見たことで、被災者である私も震災というものを少し客観的に見る事ができたと思います。論文テーマは「昭和三陸津波の復興と政治」。過去の津波災害ではどのように復興がなされたのかを調べました。東日本大震災からの復興を考える上で大きな意味を持つと思ったからです。

3年次になり、就職活動の準備を始めながらも、学問



紙面整理では、どのニュースが大事なのか読者が一目でわかるよう、メリハリのあるレイアウトを意識しています。

淑徳大学3年次で、お祭りの出店として、被災地に関心を持ってもらおうと、現地の物産を販売しました。

に対して「まだやりきれない」との思いが強く、明治大学大学院への進学を決意。大学院では論文の執筆と並行して、授業の課題や発表準備に追われるなど、修行の日々でしたが、政治学についてより深い学びを得ることができました。また、学問に打ち込むことで視野が広がり、愛知淑徳大学の理念である「違いを共に生きる」力や考え方が身につきました。卒業後、国籍も出自も考え方も異なる人々と数多く出会ってきましたが、互いに尊重し合い、関係を築くことができたのも愛知淑徳大学での4年間があったからだと思います。

### 新聞社に入社し、研究で培った力を発揮。

大学院修了後、地域に根差した日刊紙「石巻かほく」を発行する三陸河北新報社へ。震災報道にも力を入れていたため、研究で培った自分の力が発揮できると思い入社しました。記者として警察・消防などを担当後、河北新報社編集局整理部に出向。現在は河北新報メディアセンターに勤務し、主に河北新報夕刊の紙面整理を担当しています。紙面整理とは記事の見出しを考え、紙面のレイアウトを行う仕事です。同じ内容の原稿でも、見せ方で印象は大きく変わってきます。記事で本当に伝えたいことは何なのかをまず自分で理解し、それをかみ砕いて見出しを考えています。大切にしているのは、常に読者の立場を意識した「わかりやすさ」と「正確さ」。「見出しはシンプルに」、原稿を書く時も「できるだけ平易な文章で」を心掛けています。自分の携わった紙面が実際に新聞となって手元に届くと「新聞を作った」という実感が湧き、やりがいにつながります。これからも地域の新聞社として他紙にはない話題を提供できるように頑張りたいと思います。

愛知淑徳で学ぶ皆さんも、多くの事に挑戦して可能性を広げ、好きな事に打ち込む有意義な時間を過ごして、将来に役立つ力を育ててください。